

多文化社会における文学

一日中両国の文学における龍を中心にして一

台湾大学日本語文学科教授兼主任 陳明姿

どの国の文化でも外国の文化とかがかわる可能性がある。特に外国との交流が頻繁であればあるほど、その国の文化は外国の文化とのかかわりあい深いと思われる。日本も古くから中国など多くの国と頻繁に交流していたため、古代の日本には早く中国文化など外国文化とのかかわりが見られる。いわば、古代日本の社会は多文化共生の社会である。そして、そのような多文化共生の現象は当時の文学にも反映されている。古代日本文学における龍には特にそのような様相が強く見受けられる。そのため、ここでは特に龍に焦点をあて、試みにその多文化共生の一面を考察しようと思う。龍は現代人にとっては想像上の動物に過ぎないが、古代中国人にとっては実在した生き物である。河南濮陽の墓から発掘された仰韶文化（新石器時代、紀元前5000年から3000年まで）の中から貝殻でアレンジされた龍の図形をしたものが見られ、『山海経』『易経』『左伝』『淮南子』『荘子』などの古い文献においても、龍に関する伝説が多く記されている。中国には古くから龍にまつわる説話が多くあるのである。そして、時代が降って、仏教の伝来とともに、インドや西域各国から、仏典や仏教説話などを通して、さらに新たに龍に関する説話が多く中国に伝わってきた。そのため、六朝や唐代以後の文学において、いっそうバラエティーに富んだ龍の説話が現れるようになった。そして、これらの龍の説話は日本と中国が頻繁に交流していたもとに、多くの典籍（中文訳の仏典をも含めて）とともに日本にも伝来した。『日本書紀』以来、多くの龍のキャラクターが日本文学に登場してきた。とりわけ『今昔物語集』の中に、各種の龍のキャラクターが現れるようになった。今回の発表は多文化社会における文学を探求する一環として、特に『今昔物語集』を中心に、日本文学の龍が中国など外国文化の龍といかなる関連を有するのかを考察しようとする試みである。